

杉本真維子（詩人）選評 2020.3.17

●新人賞候補者 3名

※山田洲作

「そもそも爪の垢煎じて飲ませるな」「玄関前で／蟬が死んでいた／／ごめん／なんか救われた」「放置自転車はしゃべらない／／／高架橋の下はみずうみだ」「ペンギンが好きだという友人が／よく電話をかけてくる／／秋」「重機の免許を集めようとした季節／は遠のいた／／遠のいた」「すすきは風の絵筆だと／／想う暇なき青信号」「隣家からの掃除機の音が／／朝の心に水平線を引いていく」「京の寺院の緑の中で／経を唱える僧がいること／／その事実へ心を寄せて耐えていく」「春／／久しぶりに網棚にカバンをのせる」「病棟の光は連れて帰れそう／／綿毛のたんぽぽ遠目から見る」

1行15文字以内、5行以内という時空間を十分に生かそうとしていて、フォーム（形式）や改行に対する意識の高さにおいて卓抜している。「そもそも爪の垢煎じて飲ませるな」という一行作品には結構な衝撃を受けた。誰も言語化できなかった小さな違和感を巧みに擡いで上げている。

※阿部圭吾

「嫌われているから天の川でした」「百均の皿割りまくる夏の果」「泉まで歩いてまぼろしと分かる」「とびら、って言うとき動く肋骨の／どこまでが夏の入り口」「友達の友達が羊飼いと／君の口笛 すっとんきょうな」「傘の骨もろくてクリスマスツリー」「立つための足で／あなたが立っている／ 雪原／あなたという冬の骨」「曼珠沙華揺れて戦後が遠ざかる」「八月の／ふたりっきりの夕暮れに／つり革がいつせいに傾く」「手で作る蝶をゆっくり崩すとき／まぼろしの夏草が光った」

力のある書き手。余分なものを排した的確な言葉選びが、説得力を生んでいる。とくに「八月の／ふたりっきりの夕暮れに／つり革がいつせいに傾く」は鮮やか。わっと大胆に差し込まれたつり革の映像が既存の夕暮れを一変させ、心の波立ちも映し出している。

※たかせ

「青々と／車両に響く／「ふじわらの？」／「みちなが」／未来の楽器の音色」「ショートコント「生活」「水生恐竜のはだ／梨の皮の裏側」「夕やけを解体しながらする猥談／楽しい転がり生きることは」「手放すのが辛いなら／初めから持たなきゃいいんです／整理収納アドバイザー二級」「暴言講座に通いたいなあ」「暴風警報 怯えるわたし／賞味期限切れ怖がるあなた／長生きできる気がしませんか」「わたしには／セリヌンティウスが／おりません／反省文の一行目」「句点で終わる感情が／肺を回遊し続けていて、」「熟れたしいたけのひだから／夜の森のにおい」

言葉のなかに意味の空白のようなものを導き入れて、優れたライトヴァースに仕立てている。「水生恐竜のはだ／梨の皮の裏側」は、恐竜のはだを見たことがないのに、なぜか腑に落ちる。

●奨励賞候補者 5名

※郡司和斗

「火と柁とおくの町で買う水菜」「雨の打つへんな和訳の看板を」「雪で歯を磨く既読はまだつかない」「電車で眠りきみの部屋でも眠る冬」「バイトすぐやめるし庭の雪食べる」「海にきてうみの匂いの日記買う」「雪の降るたびに睫毛に魚うまれる」「あるだけの鈴を抱えて春の海」「死にたての小鳥の／ようなホッカイロ」「だぼだぼのたましいを着て／凧あげる」

遠い場所で、語と語がしずかに衝突し、まぶしい光を噴き上げている。「電車で眠りきみの部屋でも眠る冬」で、眠っている主体は誰なのだろうか。見えない「ぼく」か、「きみ」か、それとも「冬」か。このなかでもっとも主体からは遠そうな「冬が」「眠っている」と読めるところが大きな魅力だ。

※合川秋穂

「火でも沸く電気でも沸く水 無傷」「駅と駅の間を歩く ここだって町」「ふと立つ棒／かつて木と呼ばれたこと」「常に眠いけものとして生きのびる」「病む／貝の異物が真珠にならなかった朝」「自分の部屋ないまま育ち／夜を知らない」「マイナンバー／知らない人の舌も赤い」「馬であったらやり過ごせた夜」「辞書めくる手つきだ／どこかにあると信じる」「内臓を想像できないまま死ぬ」

語にごつごつとした手触りがある。言い換えれば、力強いリアリティがある。とりわけ、「辞書めくる手つきだ／どこかにあると信じる」が印象に残る。ああ、あの手だ、と私たちが思い起こす手と、言葉で書かれている手が、はっきりと重なる。

※田中傲岸

「好きなものを／おしゃれ呼ばわりされ／侮辱された気分になり／無理に放屁する」「雪に残った／足跡をたどると／唐突に切れた／それで／空を仰いだ」「呼びかけても／去りゆく相手と／気づかれぬ自分／どちらが幽霊なのか／迷うところだ」「そりゃあ／不死鳥だって／大量発生したら／駆除されるよ／きっと」「見えないものは／信じてもらえない／才能も／現像して初めて／認められるのだ」「恐竜がすでに／絶滅していて良かった／人間もいつか／そう思われるのだろうか」「思い出や記憶は／必ずしも／ノンフィクションや／ドキュメンタリー／ではない」「家と学校や会社／以外の場所が／実は地球の／九十九パーセント／なんだぜ」「事実／言葉はすべて当て字で／文章はすべて引用で／できている」「木が／林になり／森になるグラデーションの／奥地に／闇の起源がある」

言葉の接続が巧み。たとえば、「雪に残った／足跡をたどると／唐突に切れた／それで／空を仰いだ」など、地味な作品ながら、改行の「間」が生かされ、時間が前へと進んでいる。「それで」の急展開で、「いまここ」が引き寄せられ、人間が動いている。何より、詩を書くこととする意識を強く感じる。今後に期待したい。

※走らないうさぎ

「思い出がある気がして／倒せない助手席／差し込む夕日は無色」「ハンバーグ今あたし／お母さんに／とっても会いたい」「髪たわむ／ベッドシーツと／わたくしで／一作品なら誰か撮ってよ」「画鋲刺すときに／少しもためらわず／進んで動く右手が／こわい」「女の子いまもむかしも／集まってかわいいになる／あたしかわいい」「冷蔵庫だまれ／父さんが母さんに／何て言ったか聞こえなかった」「飲み込んだ／言葉はどこへも出て行かず／ずっとあたしのここにあるんだ」「色鬼を美術館でした夢」「ポップコーンが／買えないくらいに／自分のことを決めつけている」「好きだったカフェも／いつのまにかなくなって／こんなふうに／人も死ぬのかな」

むりな力を加えない素直な言葉でここまで言えるものなのか、と新鮮な驚きがあった。「女の子いまもむかしも／集まってかわいいになる／あたしかわいい」など、すがすがしい自己愛も魅力だ。

※藤色

「ケシゴムを探して四つ足の夕暮れ」「雲のあのへんを撫でてやりたい／きっと喜ぶ」「一株生えた白い花は献花のようで」「ばんそうこう貼り直す気持ちで／チャイムを鳴らした」「わたしたちが空にかいた絵は／いつだって本物だった」「トースターのつまみを／ゼロに持っていく時の音がいやだ」「肉よりも骨のほう为爱せる」「むかしむかしおじいさんと／おばあさんがいましたって／詩みみたいなことばだ」「試験管に／雲をつめる化学者のむすめ」「わたしさっきまでのことを／押さえつける文鎮です」

生理的な好悪から目を逸らさずに、感触をしっかりとつかむ。「肉よりも骨のほう为爱せる」は、なかなか書けない境地だろう。今後に期待したい。